南太平洋海域調査研究報告　No.59（2018年3月）
OCCASIONAL PAPERS　No.59（March 2018）

『江戸の博物学：島津重豪と南西諸島の本草学』の刊行

高津　孝

TAKATSU Takashi, *Edo no Hakubutsugaku: SHIMADU Shigehide to Nansei Shoto no Honzougaku* (Natural History in Edo Period: SHIMADU Shigehide and Natural History of Nansei Islands (Chain of Islands Extending from Southwestern Kyushu to Northern Taiwan)), Heibonsya, 2017.7

TAKATSU Takashi

鹿児島大学法文学部
Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University

要旨

2017年7月に平凡社より、江戸時代における薩摩と琉球の博物学的探求について概説した高津孝著『江戸の博物学：島津重豪と南西諸島の本草学』を刊行した。

2017年7月に平凡社より刊行された『江戸の博物学：島津重豪と南西諸島の本草学』（高津孝著）は、国文学研究資料館が企画した「ブックレット“書物をひらく”」の中の一冊で、日本の書物文化を平易な読みものの形で社会に提供することを目的とするものである。

江戸の博物学と題するが、主として薩摩藩主島津重豪時代に発展した薩摩、琉球（九州南部から南西諸島全体）を対象とした博物学的研究を紹介する。全体は三章に分かれ、第一章「薩摩の博物学」、第二章「琉球への視線」、第三章「大名趣味としての鳥飼い」で構成される。取り上げた書物は、第一章では『質問本草』、『成形図説』で、第二章では、『中山伝信録』、『中山伝信録物産考』、『琉球産物志』、『御膳本草』、『琉球百問』で、第三章では、『鳥賞案子』、『鳥名便覧』、『百鳥譜』、『禽品　薩州』、『薩摩鳥類図巻』、『島津禽譜』、『鳥類魚類之画』、『西洋諸鳥図譜』、『成形図説』鳥部である。薩摩藩に関連した博物学関係著作はそのほとんどが取り上げられている。以下、その内容の概略を示しておこう。

江戸後期、日本における博物学の視線は、北は蝦夷地へ、南は琉球へと向かった。薩摩藩主島津重豪によって主導された薩摩の博物学は南への視線を特徴とする。薩摩藩においては、明和5年（1768）頃、九州南部の薩摩藩本土部から琉球王国の八重山諸島まで、南北一千キロにわたる地域の生物調査が行われた。しかし、その調査で得られた標本類を学術的に分析しまとめあげる人材は薩摩藩にはおらず、標本は外部の人材である江戸の本草学者である田村藍水に下賜され、『琉球産物志』（1770）が著述される。その後、薩摩藩は曾槃という本草学者を召し抱え、薩摩藩としての本格的な博物学的探究を始める。まず手がけられたのが、薩摩藩内の植物が薬としてどのような効能を持つかということを、本草学の本場である中国に質問するという事業である。琉球を通じて行われたこの事業は『質

問本草』として天明5年（1785）には一応完成するが、琉球が実質的に薩摩藩の支配下にあることを隠蔽する必要から、出版は重豪のひ孫である斉彬の時代、天保8年（1837）になった。

その後、薩摩藩は曾槃を中心として本格的な生物百科事典『成形図説』一百巻の編纂に取り組むことになる。現在では農書として知られているが、本来の構想は生物全体を対象とした総合的生物百科事典であった。曾槃は優れた本草学者であったが、その研究姿勢は文献を中心に過去の記述を整理するという考証学であった。これが薩摩博物学の限界をよく示している。島津重豪がシーボルトにも面会し、蘭学に並々ならぬ興味を抱く大名であったにもかかわらず、当時の薩摩藩の学術における蘭学の影響は限定的である。こうした点はひ孫の斉彬の時代になり、西洋学術が科学として産業として薩摩藩に導入されていったのとは大いに異なっていた。

南西諸島の生物相は、いつ、誰によって、どのように認識され記述され始めたのか。それには冊封使という制度が関わっている。冊封使とは、中国王朝が、朝貢国の国王に爵号を付与するために派遣する使節で、冊封使たちが帰国後、朝廷に提出した報告書が使琉球録である。これらは、中国王朝にとって貴重な琉球情報の集積である。康熙60年（1721）、清・徐葆光『中山伝信録』6巻が北京で出版された。これは、康熙58年（1719）琉球尚敬王の冊封副使として琉球にわたり、8ヶ月間琉球に滞在した徐葆光の著作である。この著作により、南西諸島の生物相を含む貴重な琉球情報が中国にもたらされた。本書は、日本に輸入され、明和3年（1766）和刻本が出版される。江戸の本草学者田村藍水による『中山伝信録物産考』3巻（明和6年（1769）序）は、『中山伝信録』の琉球生物相の記述に絵図を施し、考証を加えたものである。やがて、この功績が認められ、田村藍水に琉球を実質上支配する薩摩藩から、薩摩から琉球までの南北一千キロの生物調査の結果がもたらされる。これら実物標本を実見した田村が著した著作が『琉球産物志』15巻である。一方、琉球自身による琉球生物相の記述としては、琉球・渡嘉敷通寛『御膳本草』1巻（道光3年（1823）王府へ献上）がある。本書は、料理の素材になるという観点から、303 品の琉球物産について本草学的記述を行ったものである。南西諸島の生物相記述は、中国王朝としての明朝、清朝、そして日本の薩摩藩と江戸の本草学者たち、また、琉球王府と、異なる意図を含んだ異なる視線の交錯の中で進展して行ったのである。